

交流の広がりを迎えて

—国際交流委員会共催、事務職員交流、同窓会副会長参加—

沖 裕子¹

1. 交流の広がり

韓国カトリック大学に訪問して行う国際交流プログラムである「韓国言語文化研修」は、今年度で第四回を迎えた。交流の経緯を簡単にふりかえり、今回の研修成果についてふれてみたい。

まず、特筆すべきことは、双方ともに学部を単位とした交流へと広がりを見せたことであろう。そもそもの発端であった初回の交流（2000年3月）²は、韓国カトリック大学姜錫祐（カン・ソクウ）研究室と信州大学沖研究室の個人研究室単位であった。その後大学間国際学術交流協定の締結がなり、第二回からはカトリック大学言語文化学部と沖研究室との相互交流に広がった（2001年10月）³。そして、第三回研修において、信州大学側は複数の研究室からの参加者を得た（2002年10月、日本語教育学・沖研究室および社会心理学・潮村研究室）⁴。交流が実質化し、だんだんと器を整えながら発展していくことは喜ばしいことである。

さて、2004年10月25日（月）～31日（日）に行われた第四回交流は、「主催：信州大学人文学部日本語教育学分野 共催：信州大学人文学部国際交流委員会」となり、船津和幸国際交流委員長の参加を得た⁵。そして、信州大学独立行政法人化初年の試みとして、大島征二人文部長、佐藤今朝寿人文学部事務長が事務職員2名の派遣を決定し、研修団の一員として本交流への参加があった。両大学間

¹ 信州大学人文学部教授（文化コミュニケーション学科日本語文化講座日本語教育学分野）。専門は、日本語学・日本語教育学。E-mail:hoki001@gipac.shinshu-u.ac.jp

² 『日本語教育研究』参照。

³ 『信大日本語教育研究』第2号参照。

⁴ 『信大日本語教育研究』第3号参照。

⁵ 全学へも信大ホームページにて案内する試みをし、教育学部生1名の参加希望があったが、就職活動の関係で結果的に参加できなかったことは残念であった。

の事務職員交流の第1歩である。さらに、平素物心ともに後援をいただいている信州大学人文学部同窓会より副会長1名が本研修に参加された。

ちなみにこの年の両大学の相互訪問としては、2004年4月、呉昌善（オ・チャンソン）カトリック大学総長および郭晩淳（カク・マンスン）国際交流処長の信州大学表敬訪問があった。また、信州大学延鎮淑（ヨン・ジンスク）外国人教師が7学部から1年生32名を組織した研修団が、3月カトリック大学を訪問している⁶。また、11月24日（水）には、第1回信州大学国際シンポジウム（信州大学主催、信州大学人文学部主管、松本市共催）⁷が催され、そのパネリストとして姜錫祐カトリック大学言語文化学部長が来学している⁸。

2. 第四回韓国言語文化研修プログラムと研修成果

2. 1 プログラムの理念

本研修プログラムは、国際交流において必要とされる自言語・自文化への理解と、相手言語・相手文化への理解の双方に留意したものになっている。例年、事前研修において、参加者間で以下の留意事項を確認している。今回は4年生が労をとり、A5版17頁にわたる充実したしおりを作成し、そこに以下のことがらを掲載した。なお、口頭で、国際交流の基本的態度は「対等互惠」にあることを説明した。

◎全体目標

心を開き、礼を尽くして交流する。

◎個人目標

*各自が定める。

◎交流の意義を考えるにあたって

心を開き、礼をつくして交流する。

⁶ 本誌に記録収載。

⁷ このシンポジウムは、大学間国際交流協定締結後数年経過した5大学から関係者を招聘し、ひとつにはその成果を検証する目的で行われた。信州大学が作成した報告書が発行されている。

⁸ 2004年度の交換留学生については、協定にもとづきカトリック大学から5名の受入学生を迎えたが、信州大学からの派遣学生はなかった。受入留学生は、2002年度より毎年5名。派遣留学生は、2002年度0名、2003年度1名、2004年度0名、2005年度3名である。信州大学共通教育には、授業科目として韓国語事情の講義は開設されているが、外国語科目としての韓国語がなくなったことが影響しているとみられている。学部の専門課程には、韓国語関係の講座はない。

自文化・自言語についての説明能力を高める。
相手の文化・言語への共感的理解をもつ。
相手の立場を理解し尊重する。
平明な日本語で自分の考えや思いを的確に伝える。
相手の伝えたいことを正確に聴く力を養う。

◎各自の目的を明らかにすること

研修の成功は、各自の主體的な参加のあり方にかかっている。目的を明確にして参加すること。

◎安全について

無事に行って、無事に戻ることが第一目標。
有志としての参加であるから、事故等はすべて自己責任となる。
各自安全に留意すること。
集団として行動することも多いので、指示には従うこと。
時間厳守。

◎留意事項

- ・わたしたち（2004年度韓国言語文化研修団）のなかで、意見や感想の交換が自由にできる雰囲気を培う。
- ・交流の場をわきまえる。交流の相手はカトリック大学校の学生だけではない。先生方にもお世話になるし、大学関係者にもお世話になる。また、町の中での研修では、様々な人々と接する。どのような場かをわきまえ、つつしみと感謝を忘れないこと。

◎研究的意識の涵養

日本語日本文化に関する読書と思索を行う。
韓国語韓国文化に関する読書と思索を行う。

2. 2 媒介言語

四回にわたる本交流プログラムでは初めてのこととして、信州大学中国人留学生2名が参加した。信州大学の中国語を母語とする学生と、カトリック大学の朝鮮語を母語とする学生の間では、地域国際語である日本語が共通語として使用されたことは留意すべき現象であろう。

さて、国際交流を行う際に何を媒介語とするかは、ただちに直面する現実的な問題である。今回研修の媒介言語は日本語を中心とし、カトリック大学国際交流処関係行事（表敬訪問や歓迎レセプション）が英語であった。また、韓国語講座やホームステイ時に、韓国語の使用場面があった。

信州大学側の参加学生19名は日本語教育学専攻であり、韓国カトリック大学は日本語・日本文化専攻学生が中心となっていたため、上記の状況が一番自

然であり、また交流の学習目的にもかなったものであった。すなわち信州大学学生にとっては、日本語教育学の観点から海外の大学における日本語教育の現状を体感しつつ様々な観察を通して自らの日本語と外国語としての日本語を比較考察する機会となり、また日本語教育実習を経験する場ともなっている。他方、カトリック大学学生にとっては、生きた日本語の実際使用を経験する得がたい場となるとともに、日本語スピーチ大会、日本語演劇の発表活動など日常学習の集大成の場として機能しているからである。

ちなみに前回の第三回交流においては、信州大学社会心理学専攻学生・教官と、カトリック大学の産業心理学専攻学生・教員との交流が行われたが、その際の媒介語は英語であった。媒介語はプログラム全体を通してひとつに決めるべきものではなく、交流の参加者とテーマの状況などをみながら選択していくべきものであろうと考える。

わが国の大学教育においては、当該言語文化専攻学生はともかくとして、こうした複数の媒介語使用状況が出現する国際交流というものを、実感しつつ学べる場が少ないように感じる。本プログラムは、国際交渉力をつけるための言語的基盤整備に関して考察機会を与える教育プログラムでもある。

2. 3 学生交流・事務職員交流・同窓会交流・学術研究者交流

学生交流の成果については、本誌掲載の「2004年度日本語教育実習記録及び報告」ならびに「第四回韓国言語文化研修で得たもの」を見られたい。今回交流もまた、五感と思考力を働かせながら国を超えた友情を育み、通じ合いと伝え合いを実感する一週間となったようである。

ちなみに、記録からは、参加学年によって交流経験の深化が異なっている様子が感じられる。複数回の本交流経験者であって受入交換留学生のチューターを1年間務めた経験のある学生と、初回の交流参加者の初々しい体験記とでは自ずから異なった所感が展開されることは当然であろう。

なお、本プログラムは、授業とは別の課外活動にあたる教育プログラムとしても存在しているが、参加は自由意思にまかせている⁹。大学人として自ら考えて選び、主体的に参加する行動をうながしたいからである。基本的な教育理念と指導方針を示して見守るが、今後も学生主体の運営が実現するよう願っている。

事務職員交流については、本誌に成果報告を掲載できた。また、ご参加いただいた同窓会副会長の成果報告についても同様である。本交流を側面から力強く支えていただいことに対して、桜井政男同窓会副会長、そして福嶋晴信事務長補佐、丹生山芳子学務係主任には心から感謝申し上げている。同窓の先輩として、また

⁹ 「日本語教育実習」科目履修者は、原則として参加。今回は19名中6名が履修者。

人生の先輩として、折々にいただいた講和やお話は、学生たちの心に沁みていった。

学術交流、研究者交流については、2名の信大教員の講演とともに、1名の教員がカトリック大学大学院での講義と交歓会も行った。本誌掲載の「第四回韓国言語文化研修の記録」と「信州大学人文学部国際交流委員長記録」とを参照されたい。船津国際交流委員長のご参加により、研究者交流、学術交流において深化がみられた。また、地域国際語としての日本語を中心としたこれまでの交流から、より広域の大学間交流を射程においた展望が示されたことも重要な点であろうと考える。記して、謝辞としたい。

諸種の交流を通じて、日韓の大学文化や組織、設備等、様々なレベルにおける異同の認識が、それぞれの立場の参加者の観察により深められている。そこには、韓国と日本の学術文化に対する歴史的伝統の相違から生まれる異同や、高等教育そのものに対する日韓の学校文化の相違があるとともに、カトリック大学と信州大学の経営様態の相違に起因するもの、運営に携わる個人的色彩が反映された相違など、様々な側面が認められよう。いずれにしても、両大学に認められる共通性と差異について具体的に体験観察しうる場となっていることが、こうした「顔の見える交流」のよい点であろう。このような気づきは、研究・教育現場にいずれ生かされていくに相違ない。

3. 今後の相互交流に向けて

来年度には、かねてより打診されていた韓国カトリック大学からの第一回日本言語文化研修（仮称）が、この信州の地で実現する運びとなった。「対等互惠」が国際交流の基本であるとするれば、両大学間の相互訪問による交流も、やっとその基本に立つことになる。課題は山積しているが、「顔の見える交流」を大切にす原点に立って進めたいものである。

第四回韓国言語文化研修にあたっては、韓国カトリック大学国際交流処、および同大言語文化学部より、変わらぬ様々なご援助をいただいた。学内セミナーハウス（研修院宿舎および研修施設）、外国人宿舎、大学内食堂利用、空港からの送迎を無償としていただいたほか、あたたかな歓迎の宴を設けていただいた。姜錫祐言語文化学部長、そして李範錫（イ・ボンソク）日語日本文化学科長、新任の崔完彰（チェ・チャンワン）副教授、斎藤有紀恵日本語客員教授、玉懸元日本語客員教授にはことのほかお世話になり、総長、副総長、国際交流処長、そして、国際交流事務の全てを司る権静姫（コン・ジョンヒ）国際交流課長には、様々な面でお心配りをいただいた。こうした交流の実現には、目に見えない多くの労苦

が存在する。学生選挙で選出されたという、日語日本文化学科の学生代表ユ・ジョンさん、副代表のキム・ヨンジュさん、ジョン・フィモさんはじめ、カトリック大学学生諸兄姉の献身的活動には一同大いに感銘を受けたものである。感謝にたえない。そして、信州大学学生代表中島葉子、副代表田口愛葉諸姉のご苦勞とそれを支えた参加者一人一人の働きの対しても、その勞を多としたい。

最後になったが、今回もまた、信州大学人文学部同窓会からは、物心ともにご支援いただき、信州大学人文学部後援会からも精神面での力強い支援をいただいた。そして、人文学部学部長裁量経費からは、本交流記録作成のための支援を得た。いちいちのお名前は挙げないが、多くの方々のご理解とご支援のもとに本交流がある。ここに記し、心より感謝申し上げる次第である。